684

特 253
277

（道塚）澄人著

東亜政治経済調査所版

10セン

②

0007296000

0007296-000

特253－277

政局線に躍る新官僚閥

道塚澄人・著

東亜政治経済調査所

昭和９

ABH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

684

特 253
277

[illegible]澄人 著

政局線に躍る新官僚閥

その母体と人物の解剖

10セン

東亞政治經濟調査所版

特253
277

帝國圖書館藏

政局線に躍る新官僚閥

その母胎と人物の解剖

昭和九.八.三 内交 帝圖

序に代へて

今日以降、明日の時代に生きんとするもの、少なくも政治を談じ得るものは今日の政局線分布圖を何等の關心なしに眺めることは出來ないであらう。

見よ――政黨の首領たらずんば、内閣の主班たり得ずとまで盲信された政黨人の世界が、忽然と、まことに忽然とその全貌を一變し、あるやなしや、その存在理由すら確認されなかつた官僚閥が、これまた忽然として政局線上に躍り上つたではないか――然もその總帥後藤内相は河田書記官長を參謀として、惱みの政黨を尻目に悠々と組閣し、先づ萬天下の注目を惹いたではないか――

だが新官僚今日の出現は、斷じて惠まれたチャンスにのみ乘じたものではない。そこには生まるべくして必然に生まれ、擡頭すべくして必然に擡頭した政治的、經濟的、そして社會的必然性を持つてゐる。

筆者はまづこの必然性を一瞥し、次いで新官僚の思想的根源を衝くべくその指導機關乃至は調査研究機關を一瞥し、最後に各省内にあつて横斷的に結成されつゝある官僚閥陣容の主要人物を素描した。

政治家も觀よ——軍人も觀よ——官吏も觀よ——商人も觀よ——サラリーマンも觀よ——ヂアナリストも勞働者も觀よ——

そして世を擧げて一九三五・六年の國際危機を論じ非常日本の自覺を口にするものは、本書によつて日本の政治的支配者として登場した官僚の全貌を知悉せよ——

筆者は全幅の熱誠を傾けて、全國民にこう呼びかけたい。

卽ち政局の明日を知ることは、明日に生きんとするものゝ指針であり、その動向を知ることは、その行手に燈を揭げることであるからだ。

怱卒の間に纏め、再調査の餘裕を持たなかつたことを遺憾としてゐる、近く增刷の機會には、是非ともこれを吟味したい。大方諸彥の御寬恕を乞ふ次第である。

筆者記す

政局線上に躍る新官僚閥

——その母胎と人物の解剖——

目次

序に代へて……（一）

一、新官僚閥は何故進出したか……（一）

二、指導的思想と金鷄學院……（九）

三、新官僚の揺らん國維會と新日本同盟の展望……（一三）

四、外廓團體を繞る……（一八）

五、內務省を繞る逸材……………………(二七)
六、新興淨化派の擡頭――大藏省……………(三五)
七、熱意ある學徒の集團――農林省…………(三九)
八、上層の腐敗に憤起する――商工省………(四三)
九、明日に備ふ各省の新人群…………………(四五)
イ、陸海軍部內　ロ、司法畑の新人　ハ、外務省その他の陣容
十、新官僚の目指すもの………………………(五〇)

一、新官僚閥は何故進出したか――

一九三四年七月、折しも三五・六年の國際的危機軍縮會議を直前にして岡田啓介海軍大將を首班とする內閣は忽然と出現した。

しかもこの非常時的內閣は中堅軍部と新官僚派の緊密なる提携の下に成立し、今日まで政黨人に非ずんば、內閣の首班者たり得ないかに信じられた通念を見事に覆し、政黨は完全に伴食大臣の椅子を好意的に與へられた程度で、結局泣寢入をしなくてはならない悲慘な狀態に追やられてしまつた。

ではどうしてかくも急速に新官僚閥は政局線上に躍り上つたか――如何にも忽然として出現したかに觀られる新官僚の陣營にも、必然に生まるべくして生まれ出た必然性が存在し、急速に躍り上つたかに見えるその陣營も、その實、多年眞摯なる研究に沒頭した苦惱の十餘年間があつた。この期間は官僚が地方に現はれては所謂「浮草稼業」を餘議なくされ、その專門的な手腕から云つては『融通性のない化石』として冷遇され、內閣の更迭する度每にその身邊に重大な警戒を必要とした時代があつた。

しかしこの苦惱時代は準備工作の進捗時代でもあり、次に惹起された幾多の事件を動機として次第に

官僚擡頭時代は來た。と同時にその準備工作も次第に奏效して行つた。

先づ、官僚擡頭を利した事件に滿洲事變の勃發があつた。これは政黨政治の無氣力を完全に一蹴するに十分な役割を果し、その結果は各々その專門部門に從つて研究を續けつゝあつた官僚が、政黨に代つてその國策政策を建策するの役目を引受け、軍部首腦部と新官僚とは、ここに緊密な國策審議の必要上から必然に結ばれなくてはならぬ結果となつた。

次いで五・一五事件の勃發後の政局は、政黨が政權を掌握するには頗る不利な幾多の狀態を馴致した。犬養政友會總裁を首班とする政黨政治を最後の段階として陸軍はその精銳荒木貞夫大將を內閣に送り、海軍はその專門技術並に部內の威信を相當一身に集めてゐた岡田啓介大將を送つた。こうして政黨を主體とした內閣が國策を研究し實行するに代へて、軍部並びに官僚の精銳が第一線に起つて直接國策を議するの結果となり、ここに新官僚陣は、果然政局線上にその頭角を出現せしめた。

この二つの事變と相前後して、所謂政黨禍を白日の下に暴露したと思はれる各種の大小疑獄事件は頻々として勃發した。大正の末期から昭和の時代にかけて大は小川鐵相疑獄事件から大臣級を連類とする疑獄事件、小は府市會議員を一丸とする疑獄事件、これ等は悉く政黨罪惡史を一眺の裡に展開せしめた

觀を呈して、流石に辛棒强く、鈍感であるかに思はれる程紳士的な國民の痛憤をかつた國民は今更ながら政黨の罪惡が、かくも國民の名によつて行はれてゐた事實に愕然として、政黨は利權のために國を賣り、民福を拒否する一國の政治家並に政商の巢窟だと盲信するに至り、政黨それ自身の存在理由すらも疑問視するに至つた。

第六十四議會以後、政黨を代表した議員の間でさへも、今更のやうに政黨政治、立憲政治の根本義、第一課から復習し直すと云ふ珍現象を露骨に現はし出したのである。

政黨が國民の信望を失ひその結果、必然に政黨に代るべき一つの機關――それが要望されて來れば自づと官僚派の天下は來る。しかも滿洲事變勃發を契機として軍部內の中堅將校が、學徒の如き眞面目さを以つて、農村問題、財政問題、社會問題を研究して來れば、長年各省內にあつて、これ等の重要な政策を神妙に研究しつゝあつた官僚派の精銳と結ばれ、それが橫の線に於て、次第に緊密な連携を保つて來る。

ここに新興官僚閥が、政局の中樞に進出した第三の好條件があつた。

即ちこれを現象的に觀察して來ると、滿洲事變、五・一五事件、次いで政黨首惱部を中心とする疑獄

事件の頻發から國民が政黨を無視し却つて罪惡視するやうに至つた結果、軍部中堅層と新官僚派の精鋭が必然に結ばれ官僚進出のチャンスはここに惠まれて來た。

その間、臨時議會を中心として『米なき農民』の請願運動は全國的に發展し、議會への大衆デモ化となり、この現象は軍を結成する農村子弟に及ぼす重大な影響として考慮される樣になり、軍部中堅層の軍政研究の主題目として取上られた。

この時、新官僚派の頭目として知られた時の後藤農相はこの農民大衆をどう處理したか——

全國農民の三分の一の加盟者を有つと云はれる全國產業組合を動員して、產業組合運動を猛然と全國的に擡頭せしめた。山本內相に迫つて土木匡救事業を起さしめ、農村に『現金と食糧』を持込む運動に成功した。それ以來『反組』運動は漸次抗爭能力を失つて下火となつた。

更に又、國會創始以來未曾有の二十億突破の尨大豫算を編成し、その三分の一を軍事費に充てた非常時國家の豫算を、あの老人高橋藏相を補佐して、萬人を首肯させるに足る鮮かな手並を見せた時の黑田大藏次官、これに生きた新經濟政策を注入して押通した藤井局長は、所謂新官僚派の押されもせぬ重鎭である。しかもこの生きた經濟學の手引は大藏省切つての德望家として一身に聲望を負つて、遂に大藏

大臣にまで押上られてしまつたのだ。

自ら新生命を開拓し、遂にその機會に惠まれ、その進出の途上に於て、試練に成功した。

だが新官僚閥進出は、こうしたチャンスを把握してのみ成功したのではない。そこには資本主義政治經濟機構の必然的變遷の潮流があり、官僚はこの潮流の變化に自づと乘上げねばならぬ使命を負はされてゐた。

資本主義の旺盛な發達は先づ日露戰爭以後である。ことに歐洲大戰を契機として飛躍的發展を遂げ、その資本は政治と結合するに及んで加速度的に澎漲した。つまり資本の自由主義、無政府時代である。がこれが資本主義爛熟第三期に至ると、自解作用が行はれ、國際市場の融資の停頓、或は形を變へて列國が行ふ輸入品のボイコット、國內にあつては富の偏在による不滿、都會と農村との對立から起る思想の混亂と世相の不安、勞資の對立と產業の不振、さてはこの不安の解決策のために列國が行ふ所の經濟封鎖と人口問題の解決策等々を繞つて、國際外交危機到來の警報——

資本主義はその進路を轉じ、方向變換を行はない限り動きのとれぬ狀態に陷入つて了つた。修正資本主義はどこにその立脚地を求めなくてはならないか——

それは資本家自身は勿論のこと、この經濟學の上に立脚した國家が等しく最大の苦惱とした所のものである。二十世紀の苦惱は確かにこの修正資本主義を課題とした。

ドイツ、イタリーはその進路をフアツショに求め、アメリカは產業復興の新政策によつてその活路を求め、イギリス又通商防遏の新戰策で帝國內から外國品わけても廉價で堅牢な日本品を排斥する。日英會商、日印會商はこの解決策の極めて姑息的な現はれであらう。

では日本の大資本閥はどう轉化したか――

三井は早くも政黨への××金を手控えしつゝ次の政局登場者を狙つた。即ち國本社を牙城とする平沼男一派を仲介として新興滿洲を狙打ちとし、上層フアツショと結んで軍部へ媚を賣る化粧工作に專念した。

獨占して多年巨利を博して來た三井株を大衆の手に戾すと云ふ頗る付の口實をもうけて株の公開を始めた。王子製紙株公開を皮切りに、東洋レーヨン、三池窒業、東洋棉花等の株を賣出し、この種の凝裝工作によつて利潤の獨占を更に長期のものとした。

次いでは公益事業にと稱して三千萬圓を投出し、明日に備へるの戰法をとつてゐる。

三菱は三井に比べては立遲れの感なしとしないが、名目を求めるに惑つた結果「愛國恤兵會」に五十萬圓を投出して、とも角政黨との腐れ緣を次第に軍部、フアツショ、大衆の方向へと轉換せしめるに餘念がない。

即ち大資本閥の苦惱はその自由主義經濟の發達に行詰りを來たし、その活路を轉じるに道なく方法なきに由來してゐる。一切の產業は國家權力によつて統制され、各專門部署にあるものゝ調查と研究にまつて、科學的に統制されない限り、自由放漫の政策は自然に自滅して行くであらう。結論はここにある。

この機運は前述された各種の國家的な事變と國內政治經濟機構の改造を要望する事件の勃發と相俟つて次第に助長され、それが各方面の研究調查と相俟つて具體的な方策を樹立するに至つた。

即ちその最大の眼目は「產業の國家統制」である。

これによつて國內の產業をコントロールし、財界の安定を招來せしめ、政治機構に徐ろな變革を行つて先づ第一に國民の生活安定と思想の統一運動が要望され、これは對外的には、日本主義の再認識による復古的な國家主義運動となつて現はれたのである。

そこに新官僚閥が、日本の資本主義發達途上にあつて必然に修正資本主義の一役を買ふべき使命を負

はされ、今日、急遽政局線上に躍り上つた必然性があつたと言へる。

而もこれは一方に於ては滿洲事變以來、滿洲國統制政策に專念してゐた軍部の國民政治經濟改造原案と一脈の連携を有つ結果を招來した。

がこれは經濟、政治、教育の各分野にあつて專門的に研究調査された成果が、實地に應用され、その研究題目を活用するの機會に惠まれた官僚として、軍部の要望に自づと近接したことも亦爭はれぬ事實であらう。

以上現在國民が理解し得る範圍に於て、新官僚閥の政局進出を小島精一氏の解釋に求めて見よう。

（イ）産業の國家統制その他の專門的調査研究を土臺とする組織的科學的政策の確立が急務となり、之が既成政黨の無能を暴露したこと

（ロ）既成政黨の自由主義的イデオロギーが老廢化を暴露はしたが、之に代つてファッショ的統制の旗の下に躍進した軍部も亦經濟情勢の認識不足と政治家的リーダーシップの缺陷を暴露したこと

（ハ）そこで軍部は一時的後退を自覺せねばならなくなつたが、新官僚派との提携によつて政黨政治の復活を阻止し、以つて捲土重來の機運の釀成につとめるに至つたこと

二、指導的思想と金鷄學院

新官僚閥は各省内の人材によつて横斷的に結成された組織體を總括してゐると云はれてゐるから、ここに一黨一社の如く黨首をあげて統制されてゐる筈はない。從つて、官僚はそれ自身一國策を樹立して、世に問ふと云ふが如き政策を持合せるものではない。官僚は與へられたその部署にあつて、頗る專門的な立場から、營々としてその省内に獨自の政策を研究し、對策を練つてゐる。國家に對する己れの立場は政黨人と趣きを異にし、「官吏は國家の最高目的である永久且つ無限に發展し、國家の包含する利益を保證する」ことを任務と信じてゐる。この任務を完全に行使するためには、政黨の頤使に甘んじたり又はその色彩によつて自由に淘汰されるやうでは何の意義も有しない。官吏の使命を新たに認識し、その職分上から、政黨が官吏を支配するやうでは、國民の利益を國民の手中に護ることは不可能である。このイデオロギーは國民の代表であるべき筈の政黨と、議會が全々無能力と化し、而もそこから最大の罪惡が發生した爲に國民の信望を全く失つてしまつた時代には、最も適確にその持論を國民の前に反映することが出來、國民も亦勢ひそこに期待をかけるのである。

從つて來るべき政策を吟味すれば、先づ國民、わけても下層階級農民、中小商工業者の生活安定を目標とした新事業が次ぎ〳〵と計畫されて行かう。然してその節操に於てはひとり政黨內閣の轍を踏まぬ樣努力するばかりでなく、それは自然に德望によつて民意をつながうと努力するであらう。政黨の罪惡政商との結托も當分はその跡を絕つと見てよい。

その政策の一班を覗つて見ても、後藤內相が先に農相として支配し、培つた全國産業組合運動の如きは、先づ第一着手として直ちに强化擴大運動に躍進しその方向を農村の自供自足に向けるであらう。

これを財政方面に見ると豫算を切つめ、經濟活動の自由放漫主義を警戒し、軍備費についても相當な牽制を行ふであらう。

卽ちこれ等の政策が豫見される通り新官僚閥首腦部の抱懷するイデオロギーは頗る常識的な國家社會主義である。

而もその精神主義ともいふべきものは「日本精神の再吟味」である。

そこで一轉してこれ等新官僚閥の思想的母胎である或意味での指導的立場にある金鷄學院を覗いて見やう。

金鷄學院は、東亞經濟調査局大川周明氏等とは最も親交厚く、さきには大川氏と共力して「行地社」を創設した安岡正篤氏の率ゆる一種の敎化團體である。水戶學派の流を酌み、陽明學の講義を敎材としてゐるから以つてその動向の一般を按ずるに難くはない。學院に會同し安岡氏の敎化を受け、助力を求め、氏を相談相手としてゐるものに軍部方面では今は解消したが櫻會を中心とした急進分子を始め、建川美次中將傘下の少壯組、重藤千秋少佐、橋本欽次郎、根室博少佐等を中心に、ことに尉官級の少壯分子がこの門を訪れる。

安岡氏が帝大出身である關係上帝大七生社經綸學盟等に加盟して眞摯な學徒であつた少壯組もこゝに集合する。從つて官僚派の錚々たる吉田茂、町田辰次郎、池田淸、大島辰次郎氏と言つた內務省又はその關係方面の人材がある。これ等の有力官僚は、貴族院の大塚惟精、次田大三郎、酒井忠正伯と云つた人々と一脈の連携を持つ等その橫に延長された線は相當廣範圍に及んでゐる。

わけても安岡氏が後に述べる國維會を通じて荒木貞夫大將とも親交淺からぬものがあるので、軍部內少壯急進分子は、同氏の指導精神には負ふ所頗る多い。

安岡氏が滿洲統治についての一意見中からその思想的片鱗を拾つて見ても――

「日本が實力を養ふこと、如何に滿洲を畏服（悅服）せしめ得るかの問題に歸する。抽象的な空論を戰はして何になるか――然るに又實力と云へば、只管武力に依ること丶思ひ、いや左樣ではない。德治を達成することだと云へばそれでは武力を否認するのかと言ふ。一知半解の論が頗る多い。是の如きは武や德や抑々力の何たるかを知らぬ輕薄より生ずる。（中略）治人有つて治法なしと云ひ、馬上天下を取るべし、馬上天下を治むべからずと云ふが名言である。

我等は今少しく落ついて徒らに切齒扼腕することをやめ、從容迫らず靜かに己自身を顧み、以つて六尺の孤を託すべく以つて百里の命を寄すべき人物を一人でも多く打出さなくてはならぬ。それが萬事を解決すると思ふ。』

新官僚閥の指導精神に何等の關連を有つものではないが、安岡氏のこうした思想の直接的影響を蒙つてゐる官僚は、わけても後藤新內相の幕下に雲集してゐる。右手を以つて軍部ファッショの進出を緩和し、左手を振つて自由主義放漫財政々策と政黨の壓力を防遏する。而も法に促はれずして人材によつて國家の非常時に善處しやうとする――これが新官僚刻下の政治的イデオロギーであると言へる。

三、新官僚の搖らん國維會と新日本同盟の展望

岡田內閣の中心人物後藤內相は、國維會の首班で、その國維會が岡田內閣の一背景だ等と傳へられてゐる程、後藤內相と國維會、そして岡田首相とは、不可分の關係に置かれてゐるかに見える。

では問題の國維會とはどんな內容を持つてゐるか――

國維會の首腦部に言はせると、それは決して政治的意味を持つ結社ではない。國維の更張を期さうとする人材の集合地帶に過ぎぬとされてゐるが、これを組織する人材が政治的には有力な働きを有つものであり、更に新官僚閥と呼ばれる人材が悉くこの傘下に收まつてゐる事實、更に軍部、貴族院方面の錚々たる改革論者がこゝに名を列ねてゐる事實等、から推して、國維會はそれ自身の機能以上に、政治的團體として認められてゐる。

そして會中心人物の動きは、政局の動向と常に何等かの連携を思はせる何ものかゞないではない。先づその綱領から上げて見ると次の通りである。

綱　領

一、廣く人材を結成し、國維の更張を期す。

一、大に國家の政教を興し、産業經濟の發展を期す。

一、輕兆詭激なる思想を匡し、日本精神の世界的光被を期す。

趣旨

我が國近來の内憂外患は其の重大深刻なる殆んど有史以來未曾有と言ふべし。明治の驚異すべき國民的緊張と躍進との反動に上る惰風は今や容易に改むべからず。且つ前代文化の急遽速成は政治經濟教育等百般に破綻續出し來り、而もこれに處すべき内省と忠恕との創造的精神は廢れ、一切を偏に客観的唯物的にのみ批判し去らんとし、私怨盛にして公義衰へ、國内到る處階級的反感抗爭尖鋭にして物情洶々たるに、更に隣邦の友誼全く破れ國際信義毫も恃むべからず、經濟的恐慌と政治的動搖との世界的黒雲は方に朝野を暗澹たらしめつゝあり。今にして斷然、在來因循の風を排脱せずんば遂に收拾すべからざる禍亂に陷らん。

不肖等この情勢を坐視するに忍びず、自ら揣らずして奮然身を挺し、至公血誠の同志を連ね、敢て共産主義インターナショナルの横行を擅にせしめず、排他的ショーヴィニズムの跋扈を漫にせしめず、日

本精神に依つて内、政務の維新を圖り、外、善憐の誼を修め、以つて眞個の國際昭和を實現せんことを期す。

理事 （イロハ順）

岡部長景……（貴族院議員子爵）
大島辰次郎……（内務省衞生局長）
吉田茂……（協調會常務理事）
松本學……（前内務省警保局長）
近衞文麿……（貴族院議長）
香坂昌康……（東京府知事）
酒井忠正……（貴族院議員伯爵）
湯澤三千男……（廣島縣知事）
廣田弘毅……（外務大臣）
荒木貞夫……（前陸軍大臣大將）

後藤文雄…………(內務大臣)

このうち、廣田、後藤兩氏は閣僚在任中であるため理事辭任の形式をとつてゐる。

幹　事

橋本清之助　△富田亥之七　△町田辰次郎　△安部十二造

心　得

一、同志は理論に偏倚せず、時相に拘泥せず、常に公義に遵ふべし。
一、同志は力めて人材を愛し、人材に下り、人材を結ぶべし。
一、同志は自ら地下百尺に埋るゝ覺悟を以つて事に當るべし。

大要以上の如きものであるが、全國に支部結成を目論見てゐるので、將來愈よ全國的にその兩翼を張り、全國に散在する志士に呼びかけることを念願とし、その趣旨から當然政治理論、國家改造理論が生まれてくる。

その中心人物が後藤內相である關係上、さきに內相が統卒した日本青年團聯合會の思想的役割をこれによつて充當しやうとする計畫だと傳へられる。

所謂昭和維新を說き、その方法として無血革命を强調する。擧國一致してこの難局を打開し、明治維新のそれに見るやうに、大名も公卿も町民も悉く綜合的な力を合はせその改革に進まねばならぬとしてゐる。その必然の動向が政治運動に走ることは早くから懸念されてゐたが、國維會自體はこゝに何等の根據野心を持たぬものゝ如くである。

更に國維會と殆んど同一趣旨から成立し、その包含する人材も大同少異であるものに「新日本同盟」がある。國維會を一層解放的にした形體をとり、メンバーも政黨の新人あり、舊官僚系に屬するもあり、區々としてゐるが、新官僚派の有數な發生母胎として數へられる。

後藤內相を主班者として丸山鶴吉、田澤義輔諸氏の官僚閥、杉浦武雄、風見章氏の如く國民同盟に屬する改革論者あり、横斷的には相當の廣さを持つてゐる。

ことに丸山元警視總監の關係から朝鮮有力團體のメンバーを始め、左翼派運動陣から轉向し、同氏の翼下にあるもの等々を含めて、正に百花燎亂の感がある。それだけに政治的意味を明確にして外部に働きかけること不可能であるが、こゝを繞る肥沃した畑地と心得て、同盟內で外部との連携に、進出しようと企圖する人材も少なくはない。

これ等人材の思想並びに行動は、直接的に新官僚閥の神經を刺激し、同時にこの集團の意圖なり抱負なりは、新官僚陣の政策となつて必然に表現されて來るそれ程、緊密な關連を有つてゐる。

四、外廓團體を繞る

――時事新報（九・四・六）による――

（略）官吏の體面と存立の潔白を汚す事件に憤怒の情抑へ難く、加ふるに無能緩漫なる閣僚次官等に嫌らず、純粹な官吏としての職分に生きんとする趣意に滿つる各省の中堅少壯官吏は、果然綱紀肅正を目指して强固なる廓清團體を結成せんとしてゐる。この團體を結成せんとする意向は昨年末來各省內に欝然として起つてゐたが、官吏の身分上公然として團體の結成が不可能なので、省內の事務研究會等の會を母胎的にこれを擴大し、廣汎なる研究會にして各省內の細胞組織を以つて橫の聯絡を緊密にして度々各所に會同、意見の交換をなしてゐたが、最近に至り表面は各省內の研究會であるが、その趣旨主張は嚴正なる綱紀肅正を目ざす各省橫斷的の大きな團體が結成されるに至つた。

と報へられてゐる通り、新官僚の擡頭は徐々に着々と行はれたにも拘らず、官吏としての身分上から、表面一團體の結成にまでは至つてゐない。

從つて確然とした團體、母體のない新官僚陣に外廓作用を持つ團體の存在を考へる譯には行かないが、その反面、官僚自身に確然とした所屬團體を有つてゐないそれだけに交誼關係を結び得る各種の團體は存在する譯である。

金鷄學院を一政治思想の指導機關と見ることは當らないが、敎化團體がその敎化事業を完全に遂行して行けば、その趣旨に基く政治思想の出發も必ずや求められて來る。この意味で、國維會、新日本同盟に籍を持ち純然たる官吏の立場から國家の政策を研究調査しつゝある官僚を主體として、同一立場、同一主張を持つ團體との交渉は各個に發展する。

この種の友誼的交渉が將來どの程度まで發展し得るかは、國維會を中心とする官僚の手腕に待たなければならないが、經濟現象の突發的異變の生じない限り、卽ち官僚閥の支配が、國內諸情勢の安定策に最も效果的であると信ぜられてゐる限りは愈よ勢力は擴充されると見ることが出來る。從つて來議會に臨み、議會の解散から總選擧と云ふ段取りとなれば、これ等新官僚の眞實の力量が發揮され、同時に官僚それ自身の內部に孕みつゝある政黨との協調派と更に政黨財界に對し斷乎たる鬪爭を決意する一派と

は、自づとその方向を轉じて行くであらう。

そして政黨協調派は彼等と絶縁しない代りに今日まで政黨を絶體的支持して來た外廓諸團體と次第に連携して、これ等の諸團體を傘下に叫合する。かくて來議會の解散に備へ、その陣容化に邁進することとならう。

また一方、純然たる官吏として――

「國民の掌中に國益を擁護するの任務を負ひて、飽くまでも政黨財閥の觸手と壟斷とを排撃する」

ことを主張してゐる一派は、從來彼等の專念した各省内の事務調査研究に沒頭して、政治的經綸の開發、政治行動への出發を念頭に置かないことゝなり、その實勢力は地下に潛つて恐らく表面化することはないであらう。

この意味では前者卽ち政局の中樞を自己の掌中に收めんとする一派の躍進はまことに華々しいものがある。その反面稍もすれば舊官僚と云はれて、官尊民卑の風習を形造つた所の藩閥政治家群、伊藤、山縣、黒田、松方と云つた官僚政治家の落ち行く方向と軌を同じうするであらう。

がその將來はとも角として、今日新官僚閥が掌握した政權に對し、側面から觀察すると陸海軍部内も

岡田首相自らロンドン條約の責任者であると云ふ建前から絶對的な支援を送らない代りに、强烈な反對氣勢を示すと云ふ程ではない。

政黨並に貴族院方面を一瞥しても、所謂一應の諒解は求めてゐるのだから、將來政黨無視の極端な策に出ない限り、その支持は絶對でないが、その反對も極めて消極的のものである。

その他フアッショ强化を根本の信條としてゐる軍部内の少壯將校又は民間の右翼有力團體、更に依然たる窮狀に放置されてゐる地方農民大衆も、その動向を見極はめた上、明確な態度を決せんとするものゝ如くである。

そこに、新官僚の一連が底氣味の惡い沈默を守つて、地下工作を作めつゝある眞意は容易に捕促し難い。從つてこれを積極的に支持する有力民間諸團體の數も明らかではない。たゞこの一點、卽ち

『政黨財閥の結托によつて國民の利益を壟斷しつゝある在來の政黨政治絶對反對』

の立場にあつて、政黨人の政界出身を心地よしとしない、むしろ排撃の態度を鮮明化してゐる有力團體は、將來官僚閥の政策動向によつて外廓團體としての役割を演じ來るであらう。

イ、明倫會

その職分を各種の政務調査機關紙並に文書の刊行、講演々說會の開催、青年の政治訓練としてゐるだけに、政治的指導理論も相當研究され、今日までの所、新官僚一派との有機的な連携は考へられてゐないが、政黨政治の罪惡を痛憤し、技術的專門家の手によつて國政を運用せねばならぬと信じてゐる點で現內閣の施政には根本的には反對すべき何ものも有たないであらう。

田中國重陸軍大將を總裁として退役、在鄕軍人を以つて結成され、その會員數十萬と稱されてゐる。

その主義綱領を見ると次の通りである。

一、皇祖肇國ノ神勅ヲ奉戴シテ天壤無窮ノ我國體ヲ尊重シ忠君愛國及獻身奉公ノ至誠ト道義的觀念トノ普及徹底ヲ期ス

二、旣成政黨ノ積幣ヲ打破シテ天皇政治ノ確立及國家本位ノ政治ノ遂行ヲ期ス

三、退嬰追從外交ヲ排シテ自主ト正義トヲ基調トスル外交ヲ斷行シ以ツテ國威國權ノ宣揚發展ヲ圖リ大亞細亞主義ノ實現ヲ期ス

四、統帥大權ノ發動並國際的軍備平等權ヲ確保シ以ツテ自主的國防ノ安固ヲ期ス

五、根本的行政財政及稅制ノ整理ヲ斷行シ且產業ノ振興中正ナル經濟政策ノ遂行並ニ民族ノ海外發展ニ依ツテ國力ノ充實及國民生活ノ安定ヲ期ス

ロ、皇道會

總裁に等々力森藏陸軍中將、副總裁に山下魏八郎中將、同黑澤主一郎中將、幹事長富家政市少將、副幹事長小畑錦一郎海軍大佐を連らね奥野、貴志、高田、兼坂中將等を初めとして杉村、出口、東少將等鶴田陸軍主計監、政治學博士五來欣造氏等を顧問に推戴してゐる。その他左翼戰線から轉向して來た平野力三氏を遊說部長に島中雄三氏、恒次東洋雄氏も情報部に席を置いてゐる。

その主張綱領は、流石武人を主體とする集團であるだけに最も簡單に明瞭、大膽に直率にその所信を披瀝してゐる、卽ち――

『吾人は須らく黨閥との野合的勢力を打倒し、階級鬪爭を根絕して、秩序と安寧とを確保し、皇道精神を振興して道德及理智を涵養し、國防を充實して列强の壓迫に對抗し、國際正義を確立して之を四海に宣布せざるべからず。此の如くにして初めて內外の國難を匡救し國體の精華を發揚することを得べきなり。』

と言つてるやうに、國維會、新日本同盟が揭示する樣に抽象的論理に終始してゐないだけに、時局に

處する態度は一目瞭然だ。その綱領を見ると——

皇道政治を徹底し以て金甌無缺なる我が國體の精華を發揮するを主眼とす。

一、既成政黨の積弊を打破し、以て公明なる政治の確立を期す。

二、資本主義經濟機構を改廢し一國家統制經濟の實現を期す。

三、國民道德の振興を圖り以て綱紀の肅正を期す。

四、軍備を充實し、以て國防の完備を期す。

五、國際正義の貫徹を圖り、世界資源の衡平を期す。

と言つて居る通り、これが理想を政治的に具體化するところ、國家統制經濟の運用となり、資本主義の修正を要望する。新官僚閥が日頃學徒的な熱意を以つて研究調査に沒頭しつゝある政策の外劃を示してゐるあたり、これを平面的に觀察し、當然官僚の新政策に組し得ると觀られる。

八、その他の機關と人物

先づ後藤內相が農相として君臨した時代、閣內では松本商相高橋藏相を相手に後藤農相が產業組合運動を中心にして意見對立し、一時は辭意を表明したが、その推薦者伊澤多喜男男の勸說もあつて漸く思

止つた事件がある。

卽ち時の後藤農相は、これを意識するとせざるとに拘らずその後全國に散在して一萬四千三百五十二組合、その組合員四百九十七萬人農業人口千五百萬人の約三分の一は加入してゐると言はれてゐる全國產業組合並にその中央會、中央金庫を自己の政治的地盟として、働きかけたことは事實であらう。

それは必然に全國農民の支持を期待して少數中小商工業者の進出を防遏しなくてはならぬとする政策は、農民の支持を受け、一旦緩急に望んで、後藤農相を內相に廻はした岡田內閣に支援を送ることはあまりにも明瞭である。その主事千石興太郎氏は後藤內相の腹臣として產業組合を牛耳る力量と手腕を持ち、稀に見る德望の士として知られてゐる。

更に全國青年團の聯合結成體である日本青年團聯合會は、後藤內相野にあつては理事長の要職にありその陶冶薰育に努めつゝあつたゞけに、よしその支援が抽象的散漫性を持つとは云へ、全國的なだけにあなどり難いものがある。現理事長田澤義輔氏も當然後藤內相とは肝膽相照らし得る有爲の人材として知られてゐる。

その他には吉田、安岡、町田氏等を中心として石川島自彊會、日本產業勞働俱樂部等の結成體もあつ

て、これ等は帝都の勞働者階級から率先して現內閣を支持する手をさし延べるであらう有力な團體である。

これ等の團體を中心として同組合と交換關係淺からざる諸團體がその動きに應じて來よう。

最近に後藤內相支援に全幅の犧牲を拂ふであらうと見られる人材に貴族院議長近衞文麿公がある。國維會を中心として近衞公を繞る人材は純正な官僚乃至政治改革論の提唱者であるだけにその支援は力强い。京都帝大出身の三十餘名士が非常な熱意を持つてこれが研究に沒頭し、今回の近衞公渡米の如きもこの種の人材が後押して、遂げる政治家としての貫錄養成のために一役買つて出たのである。全國產業組合中央會內にある華冑界永遠の新人有馬頼寧伯及び松平康昌侯、上野正雄伯等は近衞公を助ける有爲の人材だ。

なほ近衞公は西園寺公にも信任を博して居り、木戶侯によく、また重臣中にも露骨な反對意志を表明してゐるものはない。

後藤內相、近衞公の緊密なる連携は將來貴族院を中心として動く政局に意外の伏線を持ち、相當迂餘曲折ある政情の展開を見せるであらう。

五、內務省を繞る逸材

新官僚擡頭の機運が、最も濃厚に、そして官僚の立場からその職分以上と云つていい位に勉强もし、研究も續けて熱意に溢れてゐたのは內務畑であらう。從つてここには群雄しのぎを削ると云ふ程人材が群屬してゐる。

明日の官僚群を指導し、その盛衰興亡を決する重大な役割を演ずるのは、內務畑の新人達であらう。粒揃いである。しかもその何れもが、廣く人材を叫合し得る態の抱擁力を持つてゐるから、將來內務畑を中心に、もつと活潑な研究が續けられ、民官有爲の人士達が更にこの種の人材を助け協力して行くと云ふ形態をとるであらう。

由來內務畑は地方長官を通じて全國に呼かけ選擧の元締であるから、政黨がこの部署を重要視し、色々な意味で閣僚中でも錚々たるの人材を充てゝゐた。それだけに省內主要な人材は相當手嚴しく政黨からいぢめつけられて來た。また政黨が相當悪辣な手段を構じて對選擧戰に臨むその裏面をも、まざ〳〵と見せつけられて來た。その結果——

『政治家や實業家に内務の實勢力が支配されるやうでは國家本位の國策を樹立することは出來ない。私心なく、專念に國策研究に努めてゐる官吏が、政黨の手を放れて政府の方針としての國策を樹て行かねばならぬ。議會中心主義から政府中心主義へと動向しなくてはならぬ。』

との意見が强硬に擡頭して來た。

その崩芽は相當古いものであつたが、齋藤内閣出現に及んで政黨の手から絶縁こそはしなかつたが、官僚系が相當幅をきかし出した頃から、更に多年の懸案であつた官吏身分保證法が實施されるに及んで、省内有爲の人材は、相當大ぴらにこの種の主張を露骨に表明するに至つた。

即ち一期先輩級に屬する齋藤内閣書記官長堀切善次郎氏を初め前警視總監丸山鶴吉氏大塚惟精氏更に警視總監の藤沼庄平氏安達内相當時飛ぶ鳥落すの勢を見せた次田大三郎氏等何れも錚々たる新官僚生みの親と云ふ形だ。

これ等の人材は言合せた樣に帝大四十二年組でかため、わけても堀切氏の如きは一知事から復興局長官に、東京市長に拓務次官に進んで法制局長官と來て書記官長の椅子を獲得した。

まことにスローの標本と云はれる程齋藤内閣が、二ケ年七ケ月の壽命を保つ恐ろしいねばりを持つた

のは堀切氏の時局を誤らぬ認識に負ふ所が多い。しかしいざ最後の土端場ともなれば、御大の齋藤、高橋等の老人組を尻目に——

『内閣も責任を負ふて、桂冠しなくてはならぬ大義名文を明らかにすべきである』

と主張して一時物議を醸した程の偉ら物である。やる時は大膽にやる。

けだし新官僚閥の元締組である。

續く大塚惟精、次田大三郎氏は時めく安達内相下にあつては二頭の龍と呼ばれて次田氏の如き地方局長、警保局長、内務次官と鰻上りに拔擢され同僚羨望の的となつたものだ。

丸山鶴吉氏は周知の通り名警視總監として鳴らし、代議士朴春琴氏を押出すためには親以上の努力も惜しまなかつた。そんな緣故ばかりではないが朝鮮同志の叫合體相愛會をも牛耳つて居り、新日本同盟の主宰者でもある。

續く藤沼庄平氏も仲々の才人だ。いやに官僚を鼻にかけたやうな所謂官僚臭のない才人である點は將來まだ／＼政界方面で駿足を延ばし得るであらう。警視總監在任中、五・一五事件以來まことに帝都の治安極度に紊亂し警視廳さへも爆彈を見舞はれると云ふ物騒な時代にあつて、實に見事な腕前を見せた。

それだけにその苦心も並々ではない。日召事件、愛鄕塾事件、柴山塾事件、頭山秀三氏事件等政治方面とまことにデリケートな交渉を持つ難事件を見事に裁斷し、息つく間もなく帝都の教育界不淨事件に手を染め、更に大藏省疑獄事件を手鹽にかけて鮮かな力量を見せた。齋藤內閣治績のうち、表面化しこそしないであらうが、最も働き、最も力量を示し功績を殘した人物と云へる。

同じこの畑出身で有望な人材に長岡隆一郎氏がある。四十一年帝大出、後藤內相の先輩組であるが大臣の椅子にはまだ惠まれない。平田東助子爵の女婿、社會局長官を六ケ年間も努め上げ、才氣喚發、官僚臭のない親分肌、豪放の所がある。青年を愛し、續書をも愛する。內務監察官時代は、まさに疑獄事件のハシリと思はれる市會の砂利疑獄、ガス疑獄を暴いて、脛に傷持つ政界人を、震憾させたものだ。

さて現役に廻つて省內の御大、後藤內相を觀る。旣に國維會その他官僚陣第一戰の重要部署にあつて常に登場し知悉されてゐる通り何と云つても新官僚中のピカ一だ。

大藏に藤井あれば內務に後藤ありで、この二人材は現內閣の双璧であると同時に新官僚陣の二大支柱と云ふことも出來る。あらゆる機會を掴み新官僚陣營の政局線進出機運を釀成し來つたのは何と云つても後藤內相だ。

帝大四十一年出、大分縣出身だけに淸廉であるが剛直、仲々ねばりのある辛棒屋だ。例の全國産業組合を率ひて、それが政治地盤だと云はれやうが、一向お構なしでグン〳〵農村自給自足更生運動のためにやつた。野にあつては全國青年團聯合會の理事長となつて、全國青年の信望を一身に集める等、仲々全國的な仕事は堂に入つてゐる。

スケールが大きい。豪膽だ。しかも一見如何にも官僚臭があつて、チツト横目で他人を睨むあたり仲々才氣走つた所もある。農相として在任二ケ年七ケ月、その間省內に官吏としての政治的イデオロギーを確立し、官吏の職分を再認識させるために、事務上の打合せもさることながら、深更に及ぶまで、談論風發、勉學大いに努めた。現に省內有爲の人材は直接間接、內相の思想的指導をうけ、又はよき協力者として全幅的な信任を以つて內相を助けた手合ばかりだ。

內相の椅子を買つて出たそのこと自體、新官僚陣中に相當の議論を殘し、農相時代の聲望を持續出來るかどうか――一沫の憂色ないではないが、この椅子にあつて內相一流のガン張りを見せ、見事政黨方面と協調しつゝ、その實權を味方內に掌握出來れば大したものであらう。相手は千軍萬馬の床次遞相だ。どの程度までその實權を新官僚の手中に收めるか、まことに見もの中の見ものだ。しかも將來、新官

僚興亡二途の分岐點となるものだけに、內相の手腕に、全幅の期待がかけられてゐる。

轉じて省內の人材を見渡すと、新內務次官丹羽七郎氏もさることながら、土木局長から警保局長に拔擢された唐澤俊樹氏に指を屈する。氏は警察、土木行政、地方行政と云つた風に、あらゆる部門を手鹽にかけ、然も並々ならぬ力量を發揮し、人物も出來てゐる。大正六年の帝大出、實際方面にも經驗濟みの手腕を持ち、一方頗る理論家肌の研究家だ。その雄辯と、常に一貫した論旨を以つてヒタ押しに他に迫るあたり、頭のよさを思はせる。

山本內相に見出され和歌山縣知事から拔かれ、その手腕と識見故に臨時議會當事の全國農民請願運動の處理者として登場した。この時は流石省內の逸物達も、田舍から忽然と拔かれ、難中の難農民を救ふ大芝居を果して打ちきるかどうか――頗る疑問視されたが、何ぞ計らん、丹羽社會局長官（當時）安井地方局長等と組んで見事にこの大請願運動の暴風雨を、何等の彈壓を下さずして鎮壓するに成功した。丹羽社會局長官が次官に榮進、同時に唐澤土木局長が警務局長に拔かれたことは、ひとり人事の配置上から云つたばかりでなく、新官僚陣が愈ゝ進出の好條件に惠まれ來ることゝなるであらう。

唐澤警保局長と同期の逸材に安井英二地方局長がゐる。

眞疑の程は明からでないが宇垣朝鮮總督の政治的な一翼だとも傳へられ近衛公等にも近しいと聞く。徹頭徹尾學者肌の男、その反面烈々たる闘志を持合せ、鋭角的な政治的手腕も凡ではない。一見平凡な官僚としか見えないが、見識高く鋭く、時局を洞察するの明を持つ。社會局事務官時代その研究の成果「勞働契約論」をものにしたが、その認識の深さ、透徹した理論の鋭さ、先づ省內切つての學者、論客であらう。

行詰つた近世資本主義が、當然修正が要望されて來る。現在の正統派經濟學が變化しつゝある客觀的經濟の諸情勢を說明し批判するに全く無力に等しい。のみならず、その破綻が日々國民生活の上に迫かぶさつて、生活苦は累進する。そこに修正資本主義の必要は起り、產業の國家統制策は採用されてくる。安井局長はこうして新官僚が官吏の立場から――

『今日の國家は如何に改造さるべきか――』

の大問題を熱心に研究し。その結果、正しく新官僚が出發すべき地步――學理的な基礎を與へ、最大の研究題目を提示して、自らこれに解答を與へた。

即ち資本主義を修正し、產業の國家統制によつて全國農民を衰亡の危機から救ひ、飢々たる失業者の

ために廣く事業を興して社會不安を蕩掃しなくてはならぬ。

頑迷不靈な舊時代の化石によつて占められてゐた內務畑に、これはまた胸のすく程の新逸材が生まれた。

現に警視廳、阿部特高部長並に神奈川縣警察部長から內務事務官保安課長兼高等課長となつた相川勝六氏等は、安井氏の熱心な支持者であり、思想的の指導者と信じてゐる。

安井局長を中心に、横斷的に各省を通じて阿部、相川氏その他有數の新官僚の數は十指を屈することが出來る。

最後に省內中の貴公子大島辰次郎衛生局長がある。氏は安井局長に見る樣な鋭角的政治手腕を持合せてゐないが、秀才型の德望の人と云ふ所であらう。部下を愛し、それだけに時代的な才人を巧妙に使こなすと云ふ才腕の持主、省內若手事務官からは絕對的な信望を集めてゐる。

新官僚思想的搖らん地帶金鷄學院安岡正篤氏とは新官僚を代表してと云つていゝ程親密だ。從つて安岡イズムを省內に持込み、日本主義の再認識を理論的に提唱し、若い事務官連を相手に「明日の日本」を眞劍に研究する學徒の如き眞面目さを持合せてゐる。

例の國維會理事として活動し、近衛公によく、後藤內相によく、又更に陸軍首腦部によい。その一擧手一投足をいやしくもしないと云つた風な貴公子然とした眞面目さ、省內切つてのその德望がさうさせてゐる。

以上の人材の外、前警保局長松本學氏あり更に、石田神社局長、次いでは齋藤內閣當時愛知縣警察部長から拔かれて保安課長となり今回栃木縣知事に赴任した萱場軍藏氏等がある。

松本前警保局長は、宇垣內閣成立のために片棒を擔いたとか擔がないとか――兎角の風評は傳へられてゐるが、人物は仲々しつかりして、落つきもある。官僚陣一方の旗頭として貫錄は充分であらう。

石田神社局長、萱場栃木縣知事等は、どちらかと云へば、將來その頭角を現はす傑材で、今日の時代にあつては、むしろ沈潛してその地下工作に從ひ、明日を待望する人々と云へる。その他、表面に現はれない新官僚育ての親、又は來るべき日に備へてゐる人材も決して少くはない。

六、新興淨化派の擡頭――大藏省

後藤內相と並んで斷然岡田內閣を壓し、藏相としては省內新興勢力の絕對的な支援をうけ、燦然と光

つてゐる藤井藏相は、既に井上藏相の時代主税局長、主計局長を歴任した當時から今日あるを豫約されてゐた。

昭和の不祥事、大藏省疑獄が勃發して黒田前次官を失ひ、省全體を代表する淨化派と目されて次官の榮職に上り、月餘にして大藏大臣に推された。

四十二年東大法科を出て本年五十歳。大藏省生え拔きの逸材——その昔は宇都宮税務監督局にゐたこともあり、本省に返つては主税局國税課長、司税課長を經て東京税務監督局長となつた。轉じて主税局長として本省内に還り、そこで思ふ存分男を磨き、且つその名聲を上げた。

大臣としては未知數、これから爼上の魚となる譯だが、由來天才的な才腕に惠まれ、省内上下の信用絶對的であること等から推して先づ無事に切り拔けて行かう。

藤井藏相が、何と云つても一躍男を上げた事件は八年度の尨大豫算二十三億のうちから所謂一九三五・六年國際危機に備へる國防豫算を物の見事に編成して、海軍部内その道の達人達を驚愕させた。

更に九年度の豫算編成に當つては大角海相、後藤農相等の强硬なる意見があつたにも拘らず、海軍軍事費一千五百萬圓、それも幾多の迂回曲折を經た結果陸軍の滿洲事件費豫備金の中から一千萬圓を投出させて、鮮かな査定に成功した。かと思ふと頑として應じなかつた海軍要求に對して、「單價切下げ」の妙手を以つて時の上村經理局長（海軍）を一驚させた等の手腕を持合せてゐる。

當面の問題として黒田閥を敬遠し、黒田前次官に逐放された人材や惠まれなかつた人材に目をかけてゐる。

新官僚閥の中心人物であると同時に、その育ての親でもある。

新次官津島壽一氏は一面藤井大藏を補佐するに最適な人材であると同時に、他面別の大藏省疑獄黒田閥の殘黨を淸掃する上から云つて、最適任者と云はれる淸淨無垢な人物である。理財局長として、藤井大臣を助けて來た實力が認められたのであらう。がそれ以上に重要なことは新官僚閥の有能の士が、悉く津島次官を信頼し、わけても淸掃派を以つて自任する一派は、津島次官を防禦地帶として黒田閥の根强いブロックを紛碎しその癌を一掃しやうと計畫してゐることだ。この新興淸掃派の一派は、卽ち新官僚閥と見られ、官吏の職分を再認識して——

『官吏は斷じて大臣たることが目的であつてはならぬ。主管大臣が幾度更迭しやうが省事務當局として不動の方針を樹立し政治的に動くことを僅しまなくてはならぬ。』

としてゐる。

津島次官又この種の淸掃派に屬し、しかも省內から推される一頭目である。

理財局長青木一男氏は外國爲替管理部長から轉じて理財局の主要地位に坐つた。外國爲替にかけては斯界の通、それだけに頭も緻密、人物も出來てゐる。長野縣の產だけあつて明日の風雲を望み、ヂツト辛棒してゐる一派である。黑田前次官には特別に恩顧を受けてゐると信じられないが、とも角黑田前次官のお思召も滿更ではなかつた。

荒井預金部長が省內淸掃派から推されて完全な淸掃派進出に決定すると觀られてゐたが、藤井大臣は黑田前次官に嫌はれて稅務監督局に流されてゐた荒井部長に代へた青木部長を拉し來つた。即ち緩漫な空氣の中に省內淸掃工事を完了しやうとの肚裡からであらう。

青木氏自身何等黑田色を濃厚にしてはゐない。

明日に備へる有爲の人材であらう。

青木氏の後を繼承した銀行檢査官和中正彥氏は官僚そのものに見る純然たる官僚精神に生きるんだ。

不備不盡、黑田閥の强行軍に對してすらも超然態度を持した程の堅物で、今回はこの堅さが物を云つて

淸掃派の頭目となつた。

和田外國爲替管理部長の双璧となり、中堅幹部派の中心勢力をなして行くものに、川越銀行局長がある。黑田閥全盛期にあつては和田氏と並んで大の敬遠主義をとられ、いつも苦汁をなめて來た。

豫算決算課長を八ケ年もやつて來たと云ふ稀な辛棒家だ。元々財政育ちで金融機關方面とは腐れ緣はなく、その上人物が淸廉に出來てゐる關係から、黑田閥の二の舞は斷じて演じないであらう。

和田、川越等の新官僚閥白眉の鬪將は愈よその本陣に根據を据えて、ミツシリ淸掃運動を通じて、新官僚陣强化に奔走するであらう。

由來人材雲の如しと云はれる大藏省內では從つて潜める人傑が多い。賀屋主計局長の如きも、多年天日を見ない組に屬してゐたが、異數の拔擢をうけて豫算決算課長の椅子を空けた。その他新銀行檢査課長荒川昌二氏等、次いでは黑田色ありとは云へ入間野會計課長等擧げ來れば、人材種を接する偉況である。

七、熱意ある學徒の集團農林省

新官僚閥を代表する前後藤農相を持つてゐたゞけに人材も居り、學徒的良心を持つて農村問題の研究に沒頭してゐる。そればかりでない、時局に對する認識から國家の根本的な改革運動についても眞面目な研究が行はれ、農林省内ばかりでなく、將來は新官僚閥のために萬丈の氣を吐くであらう逸材を網羅してゐる。

先づ岡田内閣成るに及んで辭表を提出した次官石黑忠篤氏がある。農林省が正に起死回生の大事業であつた産業組合中心主義、そこから派生した自給自足運動は後藤農相の下に石黑次官並に小平權一更生部長と云つた有力なバツテリーがあつて、後藤農相と共に建策し死力を盡して戰ひ拔いた。その結果既成政黨の根強い地盤である系統農會を壓迫し産業組合の新組織を通じて全國に働きかけたものだ。

然も滿洲事變の勃發を機として軍部の政治的進出は目ざましいものがある。軍を構成する兵卒の大半を占める農民、この農民生活が極度の不安にさらされてゐるのでは必然に皇軍の意志を高揚することは出來ぬ。軍中堅分子として最も研究的な態度を持したこれ等の有數な人材は、皇軍の志氣のためにもまた重大な國策上からも農村を富ましめねばならぬと信じてゐた。生命を的に滿洲の戰野に馳せめぐり、一意奉國の純情に屍れて行く戰士の郷土が、耕しつゝ食を得られないと云ふ矛盾は許されない。農民を

富ましめよ！

この熱心な研究の結果は、必然的に軍部中堅層の逸材を中心に農林省石黑、小平、後藤等と云つた人材の會同研究にと進み、その機運は遂に内政會議開會を要望する陸軍の福井會議（昨秋大演習現地）開催にまで發展し、荒木前陸相はこれを閣議に持出した。

當時から陸軍部内では陸相の主張として軍需インフレ策を要望した。これによつて從來專門部署的に惠まれつゝあつた形式を打開して北海道、東北の農民自身を均覆するやうな、つまり軍需インフレ策が農民を潤ほす形式に於て實現しやうと計つた。この點では後藤、荒木兩相の意見はピツタリと一致したが高橋政策はこれに全幅の信賴を置かなかつた。荒木陸相辭任の原因はこの邊にも孕まれてゐた。

こうした從來の資本主義農村對策とは根本的に相違する對策を樹立して農村更生に邁進した石黑前次官の功績は多きい。

次いで農學博士小平權一更生部長がある。その俗人ばなれした、その癖お人よしで學究的で野心を持合せない人物、博士論文「農業金融論」は此が更生部長の要職にありながらもつてた斯界の文獻で、恐らくこの道にかけては農林省中、氏に追隨するものはない。

農林畑ではまことに生え拔き、四十三年駒場を出、大正三年法科を出、それから農林省入りをした。農務課長、農政課長、米穀課長等農務局の各課長席を卒業して蠶糸局長となり、昨年更生部初代の部長として就任農村自力更生運動の更生はこの更生部から生まれた名稱だ。時の後藤農相に對しては單に上官として以上に全幅的な努力を傾倒して農民のために倒れるの意氣込で當つた。

農村問題の權威者であるばかりでなく、農村對策として絶對的な自信を持つてゐる産業組合主義を旗印として實際方面に延びても仲々押しもきく、政治家らしくない政治家をしてその榮養を全く度外視して働く男だ。

組合理事、千石興太郎氏あり、中央會に有馬頼寧氏ありで産業組合主義運動の中心には、後藤農相を繞つて人材正に群棲の形であるが、小平更生部長は何んと云つても理論實踐兩方面からの實際的な指導者として貫錄は十分であり、産業組合育ての親として光つてゐる。帝國農會あたりからは仇敵のやうににらまれてゐる。

蠶糸局長の椅子にあつて農民生活の指針となつてゐる井野碩哉氏は、小平氏に遅れて三年、大正六年に東大法科を出、直ちに農林省に入り、水産、米穀兩課長をやつてゐるが中々の才人だ。農林畑だけでは飽足りないか、各省の同僚と頻りに會合を持つて政治經濟問題の研究に餘念がない。恐ろしく博學多才、政治家の出發として次官を獲得、更に延びることとの出來る人物だ。當人もその氣で親分肌をいことに多方面の人材に目をかけてゐるせいもあらうが省内局長クラスでは斷然光つてゐる。

新官僚の中堅、小平と並んで明日の時代を待望してゐる。

その他に、いさゝか閲異の傾きはあるが農務局長から拔かれて次官に進んだ長瀬貞一氏あり、文書課長から拔かれて農務局長の椅子を得た小濱八彌氏等がある。

次いでは戸田水産局長、荷見米穀部長等と云ふ逸材もないではないが、その研究が地味で、地の鹽と云ふ感じはするが、農林省内の新興勢力を双肩に負つて純正な官僚閥を代表邁進すると云ふやうな征覇的な人材は少ない。

その方面ではやはり後藤農相の傘下にあつて産業組合中心主義運動で躍つた一味の中に、根强い將來性はあると觀られる。

八、上層の腐敗に憤起する――商工省

明日の時代は云はず、今日まで官僚閥の中心勢力を結成して省内の人望をさらつてゐたものに吉野信次次官がゐる。修正資本主義を信條として産業統制法を立案し、中小商工業に對する根本對策として工業組合、商業組合、輸出組合等の産業別組合主義の基礎を開拓した等の功績は長野次官に待つ。中島前商相の信任を厚ふしてゐた所から眞正な統制經濟運動に兎角の色眼鏡をかけて見られることは同氏のために遺憾である。が岩切政務次官等が、多分に政治的意味を含めて活動した點等に比べれば、純然たる官吏の職分範圍で氏は實に勉强した。

産業組合主義の綱領をふりかざして、重要輸出品工業組合法の改正案を議會に提出して、官僚の熱意がなくては到底理解されさうもない基礎的な説明を行つて、政界策士連の憤慨を買つたこともある。

その立場からでもあるが、農林省を主體とする産業組合主義運動には可なり徹底した意見を持つ。現下の政治的經濟的諸情勢の下にあつては産組運動は相當全國都市農村に浸潤して行くであらうが、組合法の範圍を逸却して進むとなれば、當然組合課稅問題が生まれて來る、この意見は吉野次官が省内を代表してゐる形をとつてゐるので折角統制經濟運動の先驅者である彼にも深刻な惱みはある。

村瀨直養商務局長は確かに明日の時代を背負ふ官僚中の白眉だ。大正三年東大獨法科を出て農商務省に入り鑛山監督、工場監督官等を經て法制局に入り、局隨一の産業通と言はれた。その出身に似合はず明朗闊達頗る常識家の一面を備へてゐるが、反面敗け嫌ひ、實行力を持つ。次官候補としても省内屈指の人材であらう。

東株整理問題に直面してはその難解な諸問題が累積してゐるにも拘はらず、鮮かな手腕を發揮して裁斷した。

その他工務局を中心として明日の人材は成生する。工務課長の岸信介氏を初め工業課長の辻謹吾氏等もゐる。吉野次官の壓倒的な勢力下にあると云はれ、表面化した研究機關を持合せてはゐないが、地下運動は中々旺盛のものがある。鑛山局鑛政課長新倉利彦氏等も新官僚閥として明日の時代を背負ふに足る逸材である。

九、明日に備ふ各省の新人群

イ、陸海軍部内

轉じて陸海軍部内を見れば勿論新官僚と同一同味に於て政局線上に躍進したと云ふ事實はなく、そこ

に新官僚と結んで殊に意味づけるものがないが、陸軍部内中堅將校――わけても例の櫻會に所屬した將校の内には、相當多年の間國策研究を眞面目に進めつゝある一團がある。たま〳〵滿洲事變を楔機として更に五・一五事件の刺激をうけて表面化せざるを得なくなつたが、之等の人材は内政會議を開催せしめて農林省一線の新官僚と結び、軍政と農林對策の緊密な關係を明瞭にし、皇軍の志氣振興の上から云つても農村を救出しなくてはならぬと信じてゐた。ためにその專門的研究の成果である農林省の農村救濟案を支持し、その實行に積極的な後方射撃を加へ樣とした。陸軍首腦部として當然な措置である。

この事實は新官僚閥と中堅軍部との提携として傳へられ、官僚進出の背後に常に軍部あるかの如く傳へられてゐる。

この種の意見を代表する人材として殊に個人的に擧げることを控えるが、參謀本部内佐官並に少將級本省調査班、並びに經理局を中心として中堅將校の一團がある。

この一團こそ明日の時代を形成する母胎となるべき重要な役割を演ずるもので、斷じて武力一點張りの將校ではない。

さきに金鷄學院安岡正篤氏の項に於て一瞥した通り、今日時に利あらずして地方に追放され、又は進んで滿洲國に進出して明日の時代に備へる等、絶大な精力と國家改造の熱意をヒタ押しに押しこらへて地下に沈潜してゐる有數將校も數多い。これ等の逸材は上層部の政局移動に伴ふ緩漫な變化に反比例して最も急激に且つ横斷的に新興諸勢力と結んで駿足を延ばしてゐる。

海軍部内では、その威望共に他を壓する加藤寛次大將、末次信正中將を擧げればこの名將に從ふ逸材は推して知ることが出來る。

部内に相當複雜な動きを見せてはゐるが、自己の職制上の立場を利用して、こゝに私心ありと見られる事件が勃發すれば、首腦部は斷乎これに制裁を加へる。即ち中堅將校團が最も眞面目な意味で軍の威信を考へてゐるからだ。政治的野心への萌芽が軍の統制を紊すと見れば、全軍の志氣の上からこれを排撃する。こゝに軍として一貫した精神の表現がある。宇垣朝鮮總督上京に際して海軍軍事部普及委員長坂野少將罷免問題の如きもこの一現はれであらう。

岡田内閣の出現に對しても、部内中堅將校團の間には相當の反對氣勢があつたにも拘らずその事績を見守る意味から靜觀を續けてゐる。

中堅將校團は陸軍中堅分子と結び其の政局動向に間斷なき注視を續けてゐる。

ロ、司法畑の新人

政黨政治の腐敗を目のあたり見せつけられてゐる司法省の首腦部、中堅組は、その何人を問ふの必要はない。茲に何等かの改革が行はれない限り、政治機構は滅却されると公然と非難する者も少くない。例の岡本代議士の政黨裏面暴露事件があつて、檢事局は頗る峻烈な態度を以つて臨み政黨の牙城はもとよりその背後を手痛く衝いた。次いで番町會事件勃發するや各方面の多面的疑義解釋あつたにも拘らず、その態度は峻嚴、敢然として政黨財閥に迫つた。こうした勇敢な措置は檢事局主腦部を動かす若手檢事の新官僚派を代表する意向であるとさへ傳へられた。更に右事件檢擧の背後には軍部某有力者の後だてあるとも傳へられて新官僚閥が檢事局を中心に相當根强い働きを持つと信ぜられてゐた。もとよりこの關連が系統的組織的に行はれたかどうかは別として司法省内有能官吏が、政黨財閥の結托により帝國の政治を毒しつゝあることを痛憤し、改革的意見を以つて同僚相結び、その意見の表現が他省新官僚閥を代表する人材を結合し、會同の機會を待ちつゝあつたことは事實である。

今回東京控訴院長に榮轉した皆川治廣氏が單なる社會政策の見地からでなく、眞實に純情の憂國青年を收容して道場を作り、そこに皇國の未來を背負ふ青年に働きかけてゐること等、その眞意は單なる官

僚の遊戲ではない。殊に個人的に列擧することを差控えるが、司法省内部から赤化判事を出した反面、斷じて法律の化石でない、スク／＼と未來の新天地を目指して成長し、眞面目にその職分上から國政の動向を凝視してゐる人材を擧げるだけ之も既に十餘指を屈する。それは政黨の罪惡史が露骨に展開されることゝ正比例してその數を增して行くであらう。

ハ、外務省その他の陣容

燒士外交内田伯の後を繼けて登場した廣田弘毅氏は、殊にとり立てゝ官僚閥と云ふ色彩の人材ではない。陸軍の荒木大將に外交の内田伯が對祉されゝば、林陸相に對祉する廣田外相は最も好個の對照を示すであらう。

その重厚にして沈着、動ぜず騷がず、斷乎として所信に邁進するの勇氣は、非常時日本の外交として最も賴もしきものがある。國士頭山翁に寵愛され、その手腕を信頼されてゐるので、頭山翁門下の錚々たる右翼陣の志士は廣田氏と相當結んでゐる。藤井大藏大臣が次官當時、豫算編成難に直面して最後の斷案を求むべく某所に避暑中の廣田氏を煩はして初めて最後の決意が出來た——と云ふ挿話は、右翼有力諸團體の意向なり情勢なりが、表面畑違ひと思はれる廣田氏を通じて表現され、その見識に寸分の狂

ひもないと言はれる。

從つて所謂霞ケ關一派と對立して各種の對立空氣が横溢してゐるにも拘らず頑として押さへ人間廣田の顔が物を言つてゐる。現内閣が來議會に臨んで豫見されてゐる通り解散と云ふ段取となれば、廣田氏を通じて右翼諸團體の陣營は先づ新官僚閥に相當好意的な態度を示すであらう。

十、新官僚の目指すもの

こうした陣營――新官僚ブレイン・トラストはそれが中央集權的な結成體としては何等一貫した、何等統一した機關なり、頭目なりを持合せてゐない。

然しそれは官吏と云ふ職分がさうさせてゐるのだ。身分保證法は實施され、その一方政黨の屬手が已むなくも官吏の陣營から遠のく、又は遠のがさるを得ない今日の政治的經濟的社會的諸情勢が、當分このまゝ繼續するとすれば、新興官僚閥陣營は急速に强化され、自由に大膽にその職分の分野を擴大し、その上更に緊密な、學術的研究機關なり、會同のチヤンス等を把握するであらう。

岡田内閣にあつては、その主體後藤内相を送り書記官長に河田烈氏を送つてゐる。内閣は政黨と軍閥

と官僚との合作になる所謂强力内閣だ。伴食大臣の椅子をはんだとは云へ、政黨も他日あるを期待してこの冷遇に甘んじてゐるのだ。

この意味に於ては後藤、河田氏等の政治家的才腕に俟つ所は頗る多く、この機會を巧みに把握するか、又は資本閥乃至フアツショ新興勢力の攻勢に押され、手も足もその自由を失ふとすれば、新官僚閥は再び、地下に沈潜して次期政局線の展開を待望しなくてはなるまい。

豫見される如く、臨時議會は頬被りで押通し、本議會に臨んで解散のヒジトを放つとすれば、新官僚閥興亡の一戰はこの總選擧にかゝると觀られる。

新官僚の智慧袋であり、首惱部である後藤内相は、このことあるを豫見してか、早くもその腹心を相當各主要部署に配置した。しかも全國的に一見何等他意あることなきが如き形相を負びて、巧みな人事異動が行はれた。且つその異動は行はれつゝある。

他方政黨方面、わけても床次氏一派と政友派一派は危機線上、ピンチに立つて起死回生の一戰を鬪ひ拔くことゝなる。

全國に號令し得る選擧最重要の座にあつて後藤内相は除ろにその策戰を練りつゝある。

如何にして多年しん食しつゝ全國的にその勢力を擴大した政黨の牙城を衝くべきか——

如何にして新官僚陣の擴大强化を實現すべきか——

凡ては總選擧後の諸情勢が、新官僚閥の行衛方向を決するもの丶如くである。

修正資本主義から來る産業の國家統制策を政策に、議會中心主義から政府中心主義を目標に、然して中小商工業者の進出をけん制しつゝ農民の自給自足をはかるべきかを課題として、新官僚は躍進する。

「日本精神の再認識」新官僚はこのイデオロギーの旗の下に、除々に、しかも烈々の熱意を以つて、結成されつゝある。（終り）

昭和九年七月二十二日 印刷
昭和九年七月二十五日 發行

著作權所有

著者 道塚澄人

發行者 東京市麴町區内幸町一ノ六 山本義昭

印刷者 東京市麴町區内幸町一ノ六 山浦廣

發行所 東京麴町區内幸町一ノ六 東亞政治經濟調査所
電話(57) 〇五三一番 〇五五一番

9
4